高崎市文化財調査報告書第337集

下斎田重土薬師遺跡2

下斎田ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

高崎市教育委員会
技研コンサル株式会社

例　言

1．本書はガソリンスタンド建設に伴う「下斎田重土薬師遺跡」（市遺跡調査番号589）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、ＪＸ日鉱日石エネルギー株式会社の費用負担によって実施された。記して感謝の意を申し上げます。

3．本調査および整理作業は高崎市教育委員会文化財保護課の指導のもと、技研コンサル株式会社が実施した。

4．発掘調査および整理作業の体制は下記のとおりである。

遺跡所在地	群馬県高崎市下斎田402-1、403-1		
監理指導	田口一郎・田辺芳昭（高崎市教育委員会）		
調査担当	中村岳彦（技研コンサル株式会社）		
発掘調査期間	平成26年2月5日～3月5日	整理作業期間	平成26年3月6日～9月30日
調査面積	510.6㎡		
発掘調査参加者	新井　實　櫟原義久　遠藤好則　岡野　茂　加藤智恵子　鴨田榮作　今野妙子 土屋和美　竹澤賢司　丸山文江　矢内朝夫		
整理作業参加者	飯島冬子　大川明子　杉田友香　福島祿子		

5．本書の編集は中村が行い、執筆はⅠを田口が、他を中村が行った。

6．発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して高崎市教育委員会で保管されている。

7．発掘調査および報告書の作成にあたり下記の諸氏及び機関に有益な御指導、御協力を賜った。記して謝意を表します（順不同、敬称略）

小此木真理　永井智教　日沖剛史　南田法正　山下工業株式会社

凡　例

1．全体図および遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。本文および図中では下三桁を表記している。

2．挿図に国土地理院発行1/25,000『高崎』、高崎市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3．土層および遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。

4．掲載図面の縮尺は、全体図は1/250、竪穴住居跡は1/60、カマドは1/30、溝跡は1/60を基本に適宜とし、図中にスケールを示した。また、図中の略号「P」は土器、「S」は石、「K」は撹乱を表す。

5　遺物実測図及び拓影図の縮尺は土器は1/4、石器は1/1を基本とし、図中にスケールを示した。

6．本文および表中の計測値については［　］は現存値を、（　）は復元値を表す。

7．遺物写真図版は1/3に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に（　）で示した。

8．遺物実測図、遺構図のトーン表現は以下のとおりである。

焼土範囲　硬化面　構築面（基本層序Ⅶ層以下）　油煙状付着物範囲

9．主な火山灰等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間Ａ軽石：1783年）、As-B（浅間Ｂ軽石：1108年）、As-YP（浅間板鼻黄褐色軽石：1.3～1.4万年前）
Hr-FA（榛名二ツ岳渋川テフラ：６世紀初頭）、Hr-FP（榛名二ツ岳伊香保テフラ：６世紀中葉）

目　次

例言・凡例
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　調査の方法と経過……1
Ⅲ　遺跡の立地と環境……3
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅳ　基本層序……4
Ⅴ　検出された遺構と遺物……8
　1　調査概要……8
　2　遺構・遺物……8
　（1）竪穴住居跡……8
　（2）溝跡……10
　（3）土坑……16
　（4）遺物包含層……16
Ⅵ　発掘調査の成果と課題……17
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　調査区位置図……2
第2図　周辺遺跡図……5
第3図　調査区全体図……7
第4図　基本層序……7
第5図　1号竪穴住居跡・出土遺物……8
第6図　1号竪穴住居跡カマド……9
第7図　1～4号溝……10
第8図　5～7号溝……12
第9図　8・9・11・12号溝……14
第10図　10・13～16号溝、1号土坑……15
第11図　遺物包含層出土遺物……17
第12図　周辺遺跡における竪穴住居規模の推移……18

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……6
第2表　1号竪穴住居跡出土遺物観察表……9
第3表　遺物包含層出土遺物観察表……17
第4表　周辺遺跡における8世紀後半の竪穴住居跡……17

写真図版目次

PL.1　調査区全景（上が北）
　1号竪穴住居跡　完掘状況（南西から）
PL.2　1号竪穴住居跡カマド　完掘状況（南西から）
　1号竪穴住居跡No.1　出土状況（東から）
　1号竪穴住居跡掘方　完掘状況（南西から）
　1号溝　完掘状況（南から）
　2号溝　完掘状況（南から）
　3・4号溝　完掘状況（西から）
　5号溝　完掘状況（南から）
　6～8号溝　完掘状況（南西から）
PL.3　9号溝　完掘状況（北東から）
　10号溝　完掘状況（北西から）
　11号溝　完掘状況（南東から）
　12号溝　完掘状況（南東から）
　13号溝　完掘状況（西から）
　14～16号溝、1号土坑　完掘状況（東から）
　包含層グリッド1～3　調査状況（南西から）
　包含層グリッド3No.3　出土状況（北東から）
PL.4　包含層グリッド4～6　調査状況（北から）
　基本層序A－A'（東から）
　発掘調査風景（北西から）
　除草作業風景（北東から）
　出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

平成25年10月、ＪＸ日鉱日石エネルギー株式会社（以下事業者）より高崎市教育委員会（以下市教委）に下斎田町に計画するガソリンスタンド建設予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。市教委は、該当地が周知の埋蔵文化財包蔵地であり、北側の国道354号バイパス建設時の調査により水田跡・集落跡などが調査されており、周辺地域にも拡がる可能性が大きいことから、試掘調査による確認を行うことと、その結果による工事と埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。同年10月31日付けで土地所有者より試掘調査申込書が提出されたのを受けて、市教委は同年11月18・19日に工事予定地の試掘調査を実施し、古代の遺構を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、遺構面まで掘削がおよぶ事務所棟や給油キャノピー・地下タンク・浄化槽部分の記録保存の発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、技研コンサル株式会社に委託して実施することとなり、平成26年1月27日付けで高崎市長・事業者・技研コンサルの三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成26年2月5日付けで事業者と技研コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。

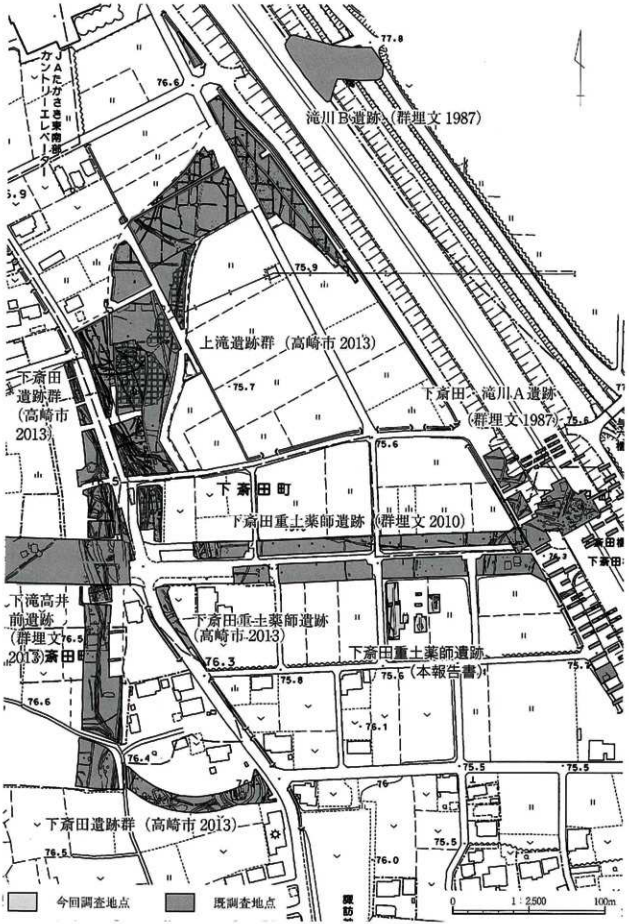
Ⅱ　調査の方法と経過

今回の発掘調査は、試掘調査の結果に基づき、現状保存が不可能な建物部分・給油キャノピー部分・地下タンク部分・浄化槽部分を対象に行った。なお、２ｃ区では、遺構の検出状況から調査区の拡張を行った。調査面積の合計は510.6㎡である。調査区名は西から順に１～３区とし、調査区の形状に応じてａ～ｃの枝番を付した。座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。

発掘調査は、平成26年2月5日から開始し、初日は機材搬入やプレハブ等の設置と表土除去を行った。表土除去は0.45㎥級バックホウを使用し、１区の北端部から２区、３区へと順次展開した。６日からは、表土除去と並行して、１区の北端部から遺構確認作業を進めた。２ｃ区では、本来、給油キャノピー部分のみのトレンチ調査を予定したが、遺構確認の結果、トレンチが１号竪穴住居跡の内に収まる状況を確認したため、この住居跡の全容が把握できるよう、急遽バックホウを使用して調査区を拡張した。10日からは、個別の遺構調査を開始。前日の降雪により約20cmの積雪に見舞われ、除雪と排水に追われつつも、確認した遺構について、基本的には、遺構掘り下げ→セクション図化・写真→遺物出土状況図化・写真→完掘状況写真の手順で調査を行った。14日、関東地方に記録的豪雪。調査地近辺も約75cmの積雪に見舞われる。交通麻痺等の雪害により、調査区へ辿り着けたのは18日であった。18～20日は、終日、除雪作業に追われる。21日から、ようやく調査を再開。雪解け水により地下水位が上昇し、常時、水中ポンプによる排水を要する調査となった。24日には、主だった遺構の調査を終え、26日に空中写真撮影を行った。撮影後、竪穴住居跡の掘方調査と、遺物包含層のグリッド調査を行った。28日に、高崎市教育委員会による終了確認が行われ、３月４日には、竪穴建物跡の掘方調査と遺物包含層のグリッド調査を終了。５日に機材の搬出やプレハブ等の撤去を行い、現地調査を終了した。

測量は、電子平板を用いて平面図の測量・編集を行い、断面図は、オルソーフォトによる写真測量で行った。写真記録は、35mm判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/PRESTO・ISO400/PROVIA・ISO400）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・SIGMA　DC18-200mm）を併用した。

整理作業は平成26年3月6日から開始した。出土遺物に関しては、洗浄、注記、接合・復元、実測・デジタルトレース、写真撮影を、遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に際してはDTPの手法を用いた。9月30日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。


滝川B遺跡（群埋文 1987）
上滝遺跡群（高崎市 2013）
下斎田遺跡群（高崎市 2013）
下斎田・滝川A遺跡（群埋文 1987）
下斎田町
下斎田重土薬師遺跡（群埋文 2010）
下滝高井前遺跡（群埋文 2013）
下斎田重土薬師遺跡（高崎市 2013）
下斎田重土薬師遺跡（本報告書）
下斎田遺跡群（高崎市 2013）
JAたかさき東南部カントリーエレベーター
今回調査地点
既調査地点
1：2,500
100m

第1図　調査区位置図

Ⅲ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

下斎田重土柔郎遺跡は、高崎市下斎田 402-1、403-1 に所在する。周辺には広大な水田が営まれ、関東平野北西縁の田園風景を遠望できるが、これを遮るように関越自動車道が南北に縦走する。近年では、国道 354 号高崎玉村バイパスや、高崎玉村スマートインターチェンジの整備も進み、その景観は徐々に変化しつつある。

本遺跡は、前橋台地の南端部に立地する。前橋台地は、利根川によって洪積世後期に形成された前橋砂礫層の上面を、前橋泥流が被覆して形成されたと考えられている。前橋泥流は、約 2.0 ～ 2.4 万年前に発生した、浅間山の一部を成す黒斑山の大規模噴火に伴う山体崩落により、吾妻川を流れ出た火山泥流堆積物で、その上部はシルト・粘土・泥炭層等によって構成される水性ローム層によって被覆されている。この台地上には洪積世後期以降、利根川や井野川をはじめとする、いくつかの河川によって小規模な氾濫原が形成され、微高地と後背湿地が巨視的には北西～南東に向かって、まだらな帯状に展開する。台地の東端には古利根川の氾濫原である広瀬川低地帯が広がる。利根川の変流については諸説あるが、概ね 15 ～ 16 世紀に洪水ないし人為的な改変によって、現在の流路に遷移したと考えられている。本遺跡の西方に流れる井野川は、榛名山南麓を水源に、前橋台地を東西に二分しながら南流し、その侵食作用は井野川低地帯と両岸に段段の段丘面を形成する。本遺跡は、この井野川東岸の下流域に形成された、自然堤防状の微高地上に立地し、東側には広大な生産域となる後背湿地が控える。

2　歴史的環境

縄文時代　前期の遺構は、下滝高井前遺跡（8）や八幡原Ａ遺跡（36）で諸磯ｂ式期の竪穴住居跡が各１軒確認されている。中期の遺構は、下斎田・滝川Ａ遺跡（7）で加曽利Ｅ式期の土坑１基が確認されている。井野川下流域東岸の微高地上には、前期から遺跡が分布するが、遺跡数は少なく、集落が確認できる程には至らない。

弥生時代　周辺の遺跡分布は希薄で、八幡原若宮遺跡（38）で中期後半～末葉の土器片が採集された程度である。該期の遺跡は、本遺跡の北西約３～４km にあたる井野川中流域に多い。西岸の万相寺遺跡や高崎情報団地Ⅰ遺跡、東岸の元島名遺跡や鈴ノ宮遺跡で、後期の竪穴住居跡や方形周溝墓が確認されており、集落と墓域が一体的に展開する様子がうかがえる。

古墳時代　前期には、井野川中流域を代表する前方後方墳である元島名将軍塚古墳（A）が築造される。井野川中流域では前代に続き、元島名遺跡、鈴ノ宮遺跡、高崎情報団地遺跡で集落と墓域が一体的に営まれており、在地社会が外来要素を受容・在地化させつつ、低地の開発を進展してゆく様子が見てとれる。該期の遺跡は、本遺跡周辺の井野川下流域でも急増する。東岸では、下滝高井前遺跡、上滝遺跡（15）、下滝天水遺跡（17）等で集落、下斎田遺跡群（3）、下郷遺跡（37）では方形周溝墓からなる墓域、下斎田・滝川Ａ遺跡、下滝梅崎遺跡（26）では集落と、方形周溝墓からなる墓域が確認されている。西岸では綿貫小林前遺跡（21）や綿貫伊勢遺跡（25）等で大規模な集落が確認されており、井野川を中心とした低地部開発の進展は本遺跡周辺にもおよぶ。中期には、井野川の対岸にあたる綿貫古墳群に普賢寺裏古墳（F）、岩鼻二子山古墳（H）、不動山古墳（G）といった有力な前方後円墳が相次いで築造される。やや時期は下るものの、Hr-FA 直下の水田跡は上滝斎田北遺跡（6）、下斎田・滝川Ａ遺跡、上滝榎町北遺跡（14）、上滝Ⅱ遺跡（16）等、多くの遺跡で確認されており、前代からの絶え間ない発展が続くようだが、対応する集落の調査例は少なく、元島名下河原遺跡（18）や不動山東遺跡（28）等で数軒の竪穴住居跡が確認された程度である。後期の遺跡は多数確認されており、枚挙にいとまがない。集落は、井野川東岸では下滝高井前遺跡、下滝赤城遺跡（11）、元島名下河原遺跡、八幡原稲荷遺跡（35）に大規模な集落が確認され、西岸では綿貫原北遺跡（23）、綿貫牛道遺跡（24）、綿貫堀米前Ⅱ遺跡（27）等に

集落が確認される。対応する生産遺跡は、Hr-FP 直下の水田跡が上滝板町北遺跡、上滝Ⅱ遺跡等で確認されており、前代からの発展を背景に集落の拡散が認められるようだ。一方、綿貫古墳群における有力古墳の分布は、政治的要因もあってか、井野川上流域の保渡田古墳群が成立する５世紀後半～６世紀前半にかけて低調である。その後、６世紀後半には椎名山東南麓を代表する大型前方後円墳である綿貫観音山古墳（E）が築造され、周辺には前山古墳（B）、御伊勢山古墳（C）などが築造される。

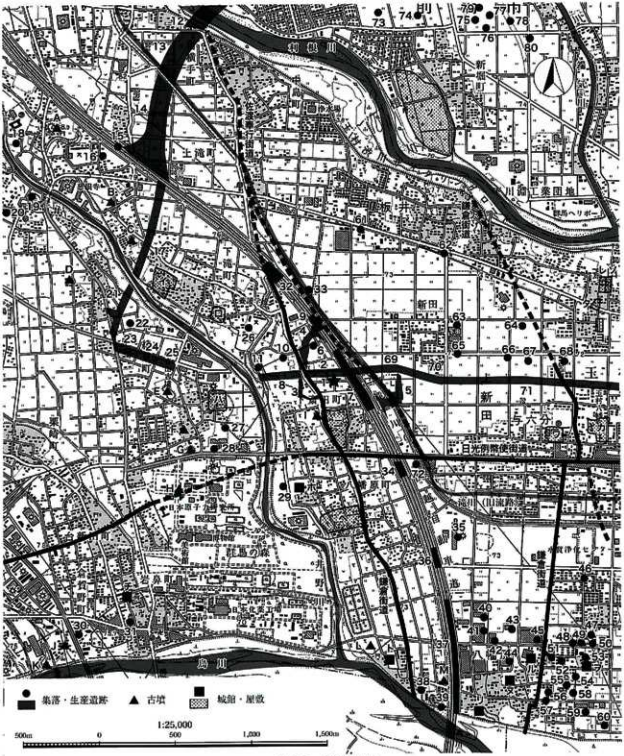
奈良・平安時代　『和名類聚抄』によれば、本遺跡周辺は、那波郡・群馬郡・片岡郡の郡界にあたる。その帰属は不明瞭だが、「斎田」を「鞘田」の変化とし那波郡鞘田郷に比定する考えもある（玉村町 1992『玉村町誌』）。集落は、井野川東岸では下滝天水遺跡や元島名下河原遺跡にやや大規模な集落が確認される。ほかに上滝遺跡群（４）、下斎田向遺跡（５）、下斎田・滝川Ａ遺跡、下滝高井前遺跡で竪穴住居跡が数軒確認されるが、集落の体を成さないほどに散発的であり、古墳時代以来の伝統的な展開とは一線を画すようだ。対応する生産遺跡は広大で、下斎田向遺跡、一本木遺跡（64）、上新田新田西遺跡（69）、上新田赤塚遺跡等、東方の後背湿地に立地する多くの遺跡で、As-B 直下の水田跡が確認されている。一方、郡界の可能性もある井野川の西岸には充実した遺跡が多く、綿貫伊勢遺跡に大規模な集落、綿貫小林前遺跡では大規模な区画溝、綿貫遺跡（22）では基壇跡と瓦葺建物跡が確認され、郡内の中核的な地域であったものと考えられる。

中世　天仁元年（1108 年）の浅間山噴火によって、周辺地域は広く As-B に埋もれた。その復興は、荘園の設置という形で成され、12 世紀中頃には伊勢神宮領の玉村御厨が成立する。鎌倉時代、幕府の下で「上野国奉行人」として守護権力を行使した安達氏は、本地域に縁が深く、玉村八幡宮（カ）は初代奉行人安達盛長の勧請といわれ、本遺跡の南に近接する八幡原館（ヘ）には安達屋敷の伝承が残る。享徳３年（1454 年）、東国における戦国時代の端矢ともいえる享徳の乱が勃発する。上野国と武蔵国を分かつ烏川の渡河点である玉村町角淵も戦場となり、文明９年（1477 年）には、古河公方足利成氏が下滝館（イ）を中心に比定される滝・烏名陣に半年近く在陣し、周辺には八千人余の軍勢が張陣したという。こうした中で、本遺跡周辺には城館や環濠屋敷が数多く分布している。発掘調査では、下滝天水遺跡で、この下滝館の別郭とされる堀跡が調査されたが、出土遺物の帰属時期から、当初から郭に付帯した堀ではないとされている。ほかにも、下滝高井前遺跡、下斎田遺跡群、八幡原Ｂ遺跡（34）、上滝遺跡、綿貫伊勢遺跡、綿貫牛道遺跡、綿貫原北遺跡等、多くの遺跡で環濠屋敷が確認されている。

近世以降　本遺跡周辺は、江戸時代初頭には高崎藩に属し、慶安２年（1649 年）には前橋藩になり、後に幕府領となった。寛政５年（1793 年）には岩鼻陣屋（チ）の支配地となった。その後、明治元年（1868 年）に岩鼻県、同４年に群馬県、同６年に熊谷県となり、明治９年（1876 年）には再び群馬県となって、現在に至る。

Ⅳ　基本層序

基本層序は、１区の北西端で観察し、これを基に１区中央と南端、２ｃ区北端、３区南東端で柱状模式図を作成した（第４図）。Ⅰ層は現耕作土で、現況は水田であった。Ⅱ層は水田床土。Ⅲ・Ⅳ層は、現況の水田以前に耕作された水田面と考えられ、As-A を含む。As-A の純層堆積は、北に隣接する群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査地点「北４区」（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『下斎田重土薬師遺跡』・以下「群埋文調査地点」）で確認されているが、今回の調査では確認できなかった。ただし、Ⅴ層上面を構築面とする４号溝の最上層に As-A の純層が確認できることから、Ⅳ層とⅤ層の間が As-A の地層位と推定できる。Ⅴ層は、いわゆる As-B 混土層で、群埋文調査地点のⅣ層、本市が 2012 年に実施した調査地点（高崎市教育委員会 2013『下斎田遺跡群３』・以下「市 '12 調査地点」）のⅢ層に相当すると考えられる。この土層は、本遺跡周辺の低地部において広域的に分布しており、北に近接する上滝遺跡群の調査では、「As-B を主体とする黒褐色系の砂質土が堆積し、



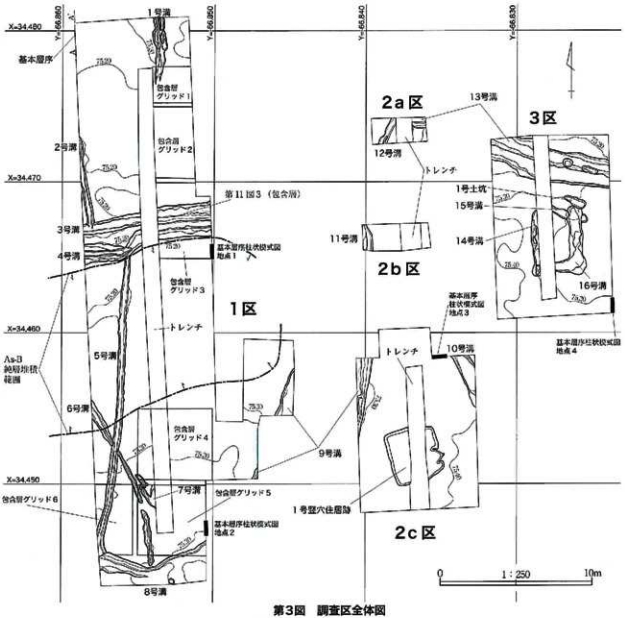
第2図　周辺遺跡図

平安時代末期以降から近世中期頃の地層位に相当する」（高崎市教育委員会 2013『下斎田遺跡群1』P 6L4・5）とされている。なお、利根川変流による洪水堆積土の影響を強く受ける横手南川端遺跡、横手湯田遺跡、南部拠点遺跡群（73 ～ 78）など前橋市南部の遺跡群では、利根川変流に伴うとされる洪水層の下位に、この土層が確認される。利根川変流の時期には諸説あるが、概ね 15 ～ 16 世紀と考えられており、この土層の形成時期を示すと推測できる。Ⅵ層は As-B の純層。今回の調査では、1 区中央部で限定的に確認できた。上滝遺跡群のⅣ層に相当し、群埋文調査地点でも確認されている。遺構確認面は、Ⅴ・Ⅵ層を鍵層に、その直下にあたるⅦ～Ⅷ層の上面と判断した。Ⅶ～Ⅷ層は As-B 降下時の旧地表面にあたり、奈良～平安時代に属する遺構の構築面であ

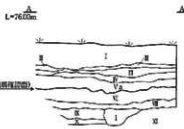
第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良～平安	中世	近世	番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良～平安	中世	近世	番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良～平安	中世	近世
1	下海個堂土器群遺跡（本郷）	△	△	△	○	○	○	39	天神塚Ⅱ遺跡				●			77	南部鶴点地区遺跡群 No.5			□	□	○	○
2	上野原遺跡（縄文遺跡）（縄文 2000）	△		○	○□	○	○	40	稲荷遺跡				○		○	78	南部鶴点地区遺跡群 No.2				□	○	○
3	下谷田遺跡群・下谷田東千田遺跡			○●		○■	○	41	八幡原赤塚遺跡				○□			79	下阿内宿町遺跡			○□	●□	○	○
4	上境遺跡群	△		●	○□	○	○	42	八清放赤塚Ⅱ遺跡				○	○	○	80	下阿内前田遺跡			○□	○□	○●	○●
5	下前田向遺跡				○□	○	○	43	赤城Ⅱ遺跡			○	○	○		A	元島名浮笠塚古墳			●			
6	上浅間日赤遺跡			□	□			44	赤城遺跡			○●		○		B	前山古墳			●			
7	下宮田・流星入遺跡	○		○●	○		○	45	宇賀遺跡			○	○	○●		C	御伊勢山古墳			●			
8	下荒高井前遺跡	○		○	○	○● ■	○	46	上之平八王子遺跡			○	○□			D	稲荷山古墳			●			
9	成川B遺跡							47	行人塚Ⅴ遺跡				○			E	横貫観音山古墳			●			
10	下高高井前遺跡	△		△	△			48	行人塚Ⅱ・Ⅳ遺跡				○			F	普賢寺東古墳			●			
11	下浅間赤城遺跡			○		○		49	行人塚遺跡				○	○		G	不動山古墳			●			
12	西横手遺跡群			○□	○□	○●	○●	50	行人塚Ⅱ遺跡				○			H	岩鼻二子山古墳			●			
13	前横手三波川遺跡	△		○△	○□	○□	○□	51	上之平石塚Ⅱ遺跡				○●			I	天神山古墳			●			
14	上浅間町北遺跡			□	□	○■	○■	52	上之平石塚遺跡			○●	○	○		J	弁天山古墳			●			
15	上浅遺跡	△		○	○	○	○	53	上之平石塚遺跡・宮遺跡	△	△		○	○		K	むじな山古墳			●			
16	上浅Ⅱ遺跡			○□		○	○	54	薬師前Ⅱ遺跡					○		L	若宮八幡北古墳			●			
17	下荒天水遺跡	△		○□	○△	○■	□	55	薬師前遺跡					○		M	天神塚古墳			●			
18	元島名下河原遺跡			○				56	角渕伊勢山Ⅱ遺跡			○●	○			イ	下高瓶					■	
19	下大聖寺沢遺跡	△		○●	○			57	角渕伊勢山遺跡			○●			○	ロ	下高瓶墳					■	
20	上大畑・中道下遺跡			○	○			58	角渕伊勢山前遺跡	△		○●	○			ハ	源氏屋敷					■	
21	横貫小林前遺跡			○	○	○■	○	59	鷲沢東・前遺跡					○		ニ	下沢屋敷					■	
22	横貫遺跡			○●	○	○		60	鷲沢・鷲沢Ⅱ遺跡					○□		ホ	浜屋屋敷					■	
23	横貫原東遺跡	△		○	○	○● ■	●□	61	笑神前遺跡				○□			ヘ	八幡屋敷					■	
24	横貫中道遺跡	△		○	○	○● ■	○	62	八反田遺跡				□			ト	沓窪屋					■	
25	横貫伊勢遺跡	△	△	○	○	○● ■	○	63	中道西遺跡				□			チ	笹島屋敷					■	■
26	下荒海道遺跡	○		○●	○	○		64	一本木遺跡			○	○□		○	リ	八幡原城					■	
27	横貫幅天前Ⅱ遺跡	△		○	○	●		65	中道西Ⅱ遺跡			○	○□		○	ヌ	宇賀城					■	
28	不動山東遺跡			○	○			66	中道東遺跡			○	○□		○	ル	中賀郷					■	
29	八幡原灰塚Ⅱ遺跡			○●	○	○■		67	中道東Ⅱ遺跡			○	○□	○□	○	ヲ	新井屋敷					■	
30	乙大応寺遺跡			●				68	熊耳東遺跡			○	○□	○	○	ワ	与六屋敷						■
31	笹島原上北遺跡			●			○	69	上梅田新田西遺跡	△		○	○□	○□	○□	カ	茂村八幡宮					■	
32	成川C遺跡	△		○				70	上新田赤塚遺跡				○□	○		ヨ	石原屋敷					■	
33	上浅杜宮司東遺跡			○	○			71	上新田中道遺跡	△		○●	□	□	○	タ	町田屋敷					■	
34	八幡原B遺跡			△	△	○□	○□	72	八幡原大品遺跡			○			○	レ	温井西屋敷					■	
35	八幡原稲荷遺跡	△		○		○	□	73	南部鶴点地区遺跡群 No.8				□	○	○	ソ	温井東屋敷					■	
36	八清原A遺跡	○		○		○	○	74	南部鶴点地区遺跡群 No.7				□	○	○	ツ	新堀城					■	
37	下郷遺跡			○●			○■	75	南部鶴点地区遺跡群 No.6				□			○：集落・墓　□：水田・畑　●：古墳・墓 ■：城跡・屋敷　△：遺物出土						
38	八幡原沼尻遺跡		△	○●		○	○	76	南部鶴点地区遺跡群 No.1				□	○	○	縄文：縄文時代　弥生：弥生時代　古墳：古墳時代　奈良～平安：奈良時代～平安時代　中世：中世　近世：近世						

る。市'12調査地点のⅣ層、群埋文調査地点のⅤ・Ⅵ層、上滝遺跡群のⅤ・Ⅵ層に概ね相当する。周辺の調査では、Ⅶ層下位に古墳時代の遺構が確認されており、今回の調査でも、限定的だが地点によっては縄文～古墳時代の遺物を少量包含する。Ⅸ・Ⅹ層に相当する土層は、周辺の調査では確認できず、ロームの二次堆積等、変則的かつ限定的な成因が推測できる。Ⅺ層はローム層。市'12調査地点のⅦ層、群埋文調査地点のⅦ層、上滝遺跡群のⅨ層に相当する。今回の調査では、以下の層序の確認は行っていないが、市'12調査地点では、下位にAs-YPが確認されている。さらに下位には、前橋泥流に相当する礫混土層が厚く堆積するものと想定される。



第3図　調査区全体図

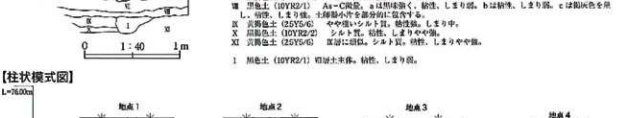


基本層序

Ⅰ　黒褐色土（10YR3/2）　現表土。水田耕作上。粘性やや強。しまりやや弱。
Ⅱ　褐色土（10YR4/4）　現表土中の水田耕作に対応する床土。鉄分の沈着顕著。粘性弱。しまり強。
Ⅲ　明灰色土（10YR4/1）　As－A中位。やや砂質。粘性弱。しまり強。
Ⅳ　褐色土（10YR4/4）　主層に層厚するがAs－A中位。層厚に対応する水田床上か。鉄分の沈着顕著。粘性弱。しまり強。
Ⅴ　黒褐色土（10YR3/1）　いわゆるAs－B混土層。bは黒味強く黒色を呈する。粘性やや弱。しまり強。
Ⅵ　明灰色土（10YR4/1）　As－B純層。粘性なし。しまり弱。
Ⅶ　黒褐色土（10YR2/2）　As－C混層。粘性。しまり強。
Ⅷ　黒色土（10YR2/1）　As－C混層。aは明味強く、粘性、しまり弱。bは粘性、しまり弱。cは褐灰色を呈し、軟質、しまり強。土師器小片を部分的に包含する。
Ⅸ　黄褐色土（2.5Y5/6）　やや強いシルト質。粘性強。しまり中。
Ⅹ　黒褐色土（10YR2/2）　シルト質。粘性、しまりやや強。
Ⅺ　黄褐色土（2.5Y5/6）　基盤に近似。シルト質。粘性、しまりやや強。

1　黒色土（10YR2/1）　明治土末層。粘性、しまり弱。

【柱状模式図】



第4図　基本層序

V　検出された遺構と遺物

1　調査概要

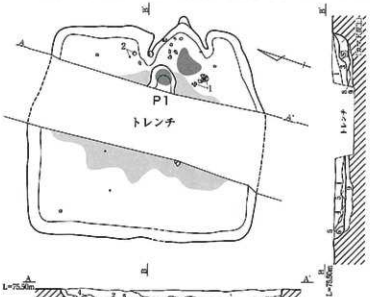
今回の調査では、奈良時代の竪穴住居跡１軒、中世以降の溝跡16条、土坑１基、遺物包含層２地点を調査した。遺物は、竪穴住居跡から土師器、溝跡から陶磁器片、包含層中から縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片が出土したが、遺構密度に比例して出土遺物の量は少なく、遺物収納箱１箱程度である。

2　遺構・遺物

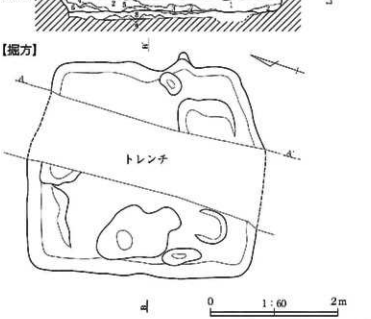
（1）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（第５・６図、第２表、PL. １・２）

調査経過　２ｃ区は本来、２ａ・ｂ区と同規模のトレンチ調査を予定していたが、表土除去の結果、トレンチの全域で本跡の覆土を確認したため、急遽、このトレンチを中心に各辺約４ｍずつ調査区を拡張し、住居跡全体の調査を行った。本跡の覆土は、上層でも焼土と炭化物を少量含むため、おおよその遺構範囲はその濃淡によって把握できたが、厳密な平面形状は確認面の精査では難しかった。そのため、本跡の中央付近をⅩⅢ層まで掘り抜いて縦断する、既存の試掘トレンチを再掘削し、その壁面の断面観察によって、住居壁面の位置と床面の高さを把握した。以降は、このトレンチ断面を拡張しながら床面と壁面を追いかけ、本跡の形状を確定した。　**位置**　２ｃ区中央部。（Ｘ＝34.450～34.455、Ｙ＝66.840～66.835）　**形状・規模**　やや不整な方形を呈する。東西3.59ｍ×南北3.76



【掘方】



１号竪穴住居跡SPA・SPB

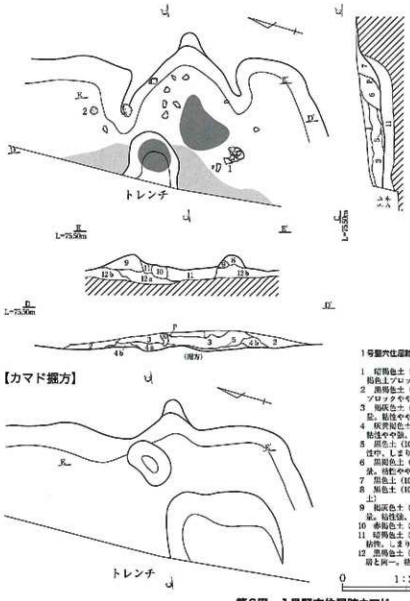
1　暗褐色土（10YR3/3）　硬土、炭化物少量。褐色土ブロック少量。粘性、しまり中。
2　黒褐色土（10YR2/3）　炭化物中量。褐色土ブロックやや少量。粘性弱、しまり中。
3　褐色土（10YR4/4）　褐色砂土多量。炭化物少量。粘性やや強。しまり中。（カマド崩落土）
4　黒灰色土（10YR1/1）　炭化物、灰多量。粘性、しまり弱。
5　黒色土（10YR2/1）　炭化物中量。硬土少量。粘性、しまりやや強。
6　黒色土（10YR2/1）　5層に酷似。軟質土ブロック少量。粘性、しまりやや強。
7　にぶい赤褐色土（2.5YR4/3）　褐色砂土ブロック、焼土ブロック多量。粘性中、しまり強。
8　黒褐色土（10YR3/2）　軟質土ブロックやや多量。粘性、しまりやや強。（掘方埋土）
9　明黄褐色土（10YR6/6）　軟質土主体。黒褐色土ブロックやや少量。粘性、しまりやや強。（掘方埋土）

第５図　１号竪穴住居跡・出土遺物

第２表　１号竪穴住居跡出土遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・技形の特徴	残存状況 備考
1	床面直上	土師器　坏	12.2	－	4.1	角閃石、石英、礫・白色粒	良好	にぶい橙色	口縁部外形ヨコナデ、体部外面体部下、底部外面ヘラケズリ。体～底部内面ニビナデ。	完形。内面に油煙状の付着物。
2	床面直上	土師器　坏	(12.2)	(9.2)	2.8	角閃石、白色粒	良好	にぶい橙色	口縁部内外形ヨコナデ、体部外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。体～底部内面ヨコナデ。	1/4。内面に油煙状の付着物。

m、深さ 0.33 mを測る。　**主軸方位**　E－18°－N。　**床面**　Ⅸ層土ブロックを含む貼り床が、ほぼ全面に施される。住居跡中央にトレンチが縦断するためやや不明瞭だが、床面は概ね平坦で、中央付近には硬化面が存在する。　**住居内施設**　貯蔵穴や柱穴は確認できない。Ｐ１は、カマド手前の床面で確認した、地床炉状の被熱面で、ごく浅い窪みの東側立ち上がり付近がスポット状に被熱する。　**カマド**　東壁の中央やや南寄りに位置する。燃焼室は、床面の構築後に灰白色粘土と暗層土の混土で構築され、底面はごく浅く窪む。火床面は、袖部の前端付近でスポット状に確認できる。煙道部はごく短く、燃焼室との境も不明瞭で、全体として緩いＵ字状の平面形状を呈する。　**出土遺物**　１・２の土師器坏は、共にカマド周辺の床面直上から出土した。１は、破損した１個体分の坏が、正位で重ねられた状態で出土した。いわゆる「北武蔵型坏」で半球形を呈するが、体部外面の未調整帯は広く、曲げ成形手法によると考えられる細かな亀裂が無数に観察できる。未調整帯に連動して、体～底部外面のヘラケズリ範囲は下降し、ほぼ底部のみに観察できる。２は1/4個体分の破片がまとまった範囲から破損して出土した。底部は平底傾向が強く、器壁が非常に薄い。底～体部にかけての器形屈曲点は明瞭で、底部外面のみヘラケズリが観察できる。内面には油煙状の付着物が観察できる。その他、覆土中～床面直上にかけて、土師器坏の細片や、いわゆる「武蔵型甕」と考えられる、器壁の薄い土師器甕胴部細片が少量出土したが、図示には至らなかった。　**時期**　床面直上出土の１・２から、８世紀後半と考える。

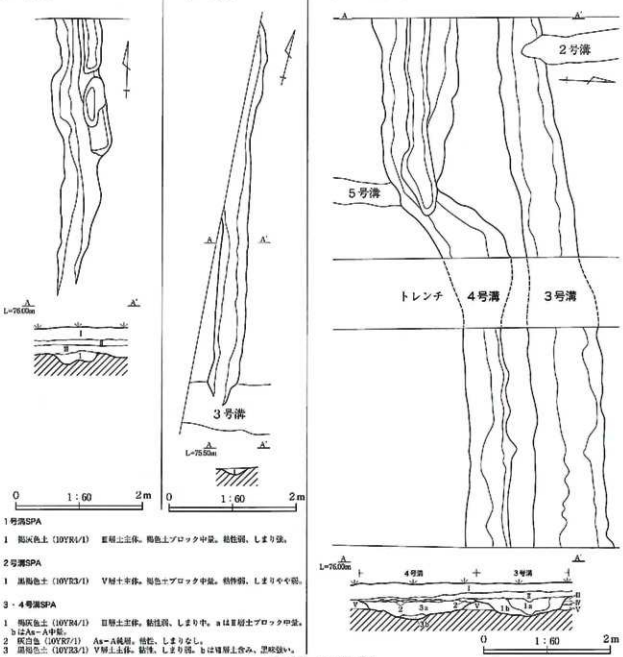


第６図　１号竪穴住居跡カマド

（2）溝跡

1号溝（第7図、PL. 2） 位置 1区北端部。（X＝34.476～34.481、Y＝－66.854） 走向方位 N－1°－W。 規模 検出長［4.43］m、上幅0.29～0.83 m、下幅0.06～0.24 m、深さ0.18 m。底面の標高は北端で75.06 m、南端で75.21 m。 形状等 南北方向に走向し、北端は調査区外。南端は徐々に浅くなり消失。断面は緩いU字状。底面は北端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅢ層土を主体とし、As-Aを含む。 出土遺物 覆土中から陶器細片が1片出土した。 時期 堆積状況から近世以降と考える。

2号溝（第7図、PL. 2） 位置 1区北半部。（X＝34.467～34.473、Y＝－66.858） 重複 3号溝より古い。走向方位 N－10°－W。 規模 検出長［6.09］m、上幅0.40～0.48 m、下幅0.13～0.29 m、深さ0.11 m。底面の標高は北端で75.11 m、南端で75.05 m。 形状等 南北方向に走向し、北端は調査区外。南端は3号溝に破壊され消失。断面は緩い孤状。底面は南端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅤ層土を主体とし、As-Bを多



第7図 1～4号溝

く含む。　**出土遺物**　覆土中から土師器細片が1片出土した。　**時期**　堆積状況と重複関係から中～近世と考える。

3号溝（第7図、PL. 2）　**位置**　1区中央部。（X = 34.467 ～ 34.469、Y = － 66.850 ～ － 66.859）　**重複**　2・4号溝より新しい。　**走向方位**　W － 8° － S。　**規模**　検出長［8.53］m、上幅 0.65 ～ 1.27 m、下幅 0.27 ～ 0.60 m、深さ 0.29 m。底面の標高は東端で 74.99 m、西端で 75.06 m。　**形状等**　東西方向に走向し、両端は調査区外。断面は緩いU字状。底面は東端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅢ層土を主体とし、As-A を含む。　**出土遺物**　覆土中から、染付皿・皿、常滑擂鉢、焙烙、土師器、円筒埴輪等の細片が少量ながら雑多に出土した。　**時期**　堆積状況と重複関係から近世以降と考える。

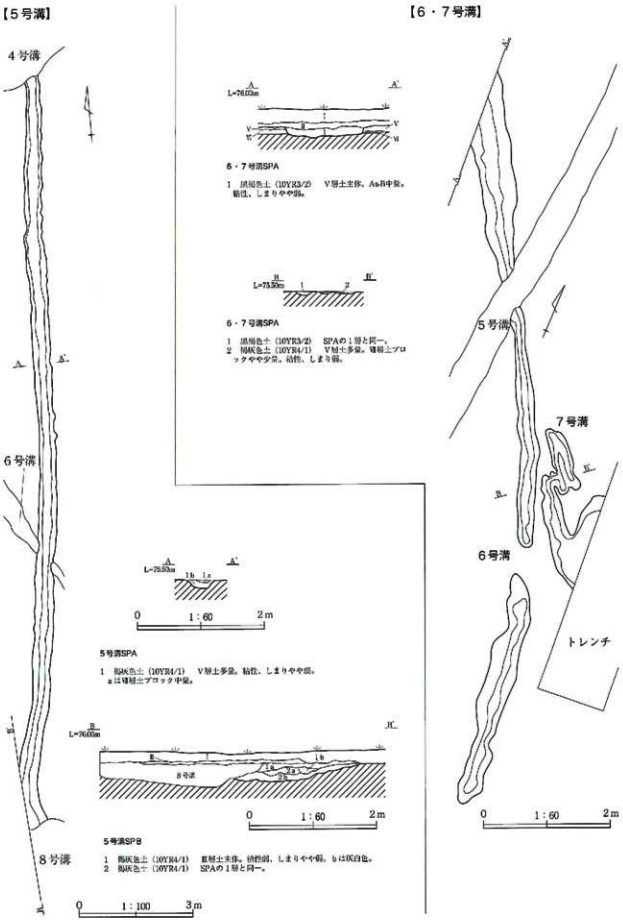
4号溝（第7図、PL. 2）　**位置**　1区中央部。（X = 34.464 ～ 34.467、Y = － 66.850 ～ － 66.859）　**重複**　2・4号溝より新しい。　**走向方位**　W － 4° － S。　**規模**　検出長［8.47］m、上幅 0.63 ～ 1.36 m、下幅 0.13 ～ 0.57 m、深さ 0.32 m。底面の標高は東端で 75.08 m、中央で 75.13 m、西端で 75.05 m。　**形状等**　調査区中央付近で緩くクランクしつつ、東西方向に走向し、調査区外に続く。断面は緩いU字状。西半部の底面は、溝状に一段低く掘り窪められているが、全体として底面は東端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅤ層土を主体とし、最上層には As-A の純層が堆積する。　**出土遺物**　覆土中から、天目茶碗、土師器、須恵器の細片がごく少量出土した。　**時期**　堆積状況と重複関係から中～近世と考える。

5号溝（第8図、PL. 2）　**位置**　1区南半部。（X = 34.445 ～ 34.465、Y = － 66.855 ～ － 66.858）　**重複**　4・6号溝と同時期。B － B′ の断面観察では、本跡を8号溝が切るが、本跡1層と8号溝1層は同質の土層であり、ほぼ同時期だろう。　**走向方位**　N － 5° － E。　**規模**　全長 20.00 m、上幅 0.31 ～ 0.48 m、下幅 0.12 ～ 0.23 m、深さ 0.28 m。底面の標高は北端で 75.16 m、南端で 75.12 m。　**形状等**　南北方向に走向し、北端は4号溝に、南端は8号溝に接続すると考えられる。断面はU字状。底面は南端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅤ層土を主体とし、最上層はⅢ層土を含む。　**出土遺物**　覆土中から土師器細片が1片出土した。　**時期**　堆積状況から中～近世と考える。

6号溝（第8図、PL. 2）　**位置**　1区南半部。（X = 34.445 ～ 34.455、Y = － 66.854 ～ － 66.858）　**重複**　5号溝と同時期。　**走向方位**　N － 21° － W。　**規模**　検出長［11.62］m、上幅 0.65 ～ 0.17 m、下幅 0.24 ～ 0.06 m、深さ 0.13 m。底面の標高は北西端で 75.15 m、南東端で 75.23 m。　**形状等**　北西～南東方向に走向し、西から南へ緩く湾曲する。北西端は調査区外。南東端は徐々に浅くなり消失。断面は緩い弧状。底面は北西端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅤ層土を主体とし、As-B を含む。　**出土遺物**　なし。　**時期**　堆積状況から中～近世と考える。

7号溝（第8図、PL. 2）　**位置**　1区南半部。（X = 34.448 ～ 34.451、Y = － 66.854 ～ － 66.855）　**走向方位**　N － 38° － W。　**規模**　検出長［2.56］m、上幅 0.32 ～ 0.17 m、下幅 0.13 ～ 0.05 m、深さ 0.06 m。底面の標高は北西端で 75.28 m、南東端で 75.26 m。　**形状等**　北西～南東方向に走向し、並行する数条の短く浅い溝によって構成される。南東端はトレンチにより消失。断面は緩い弧状。底面はほぼ平坦。覆土はⅤ層土を主体とし、As-B を含む。　**出土遺物**　なし。　**時期**　堆積状況から中～近世と考える。

8号溝（第9図、PL. 2）　**位置**　1区南端部。（X = 34.443 ～ 34.447、Y = 66.850 ～ 66.858）　**走向方位**　西側は W － 21° － N。東側は E － 24° － N。　**重複**　A － A′ の断面観察では、本跡に5号溝が切られるが、本跡1層と5号溝1層は同質の土層であり、ほぼ同時期だろう。調査区の制約上、9号溝との直接的な接続は観察できないが、覆土は類似しており、9号溝もほぼ同時期と考えられる。　**規模**　検出長［7.01］m、検出上幅［2.63 ～ 1.12］m、検出下幅［2.38 ～ 0.88］m、深さ 0.36 m。底面の標高は東端で 75.07 m、西端で 75.16 m。　**形状等**　東西方向に走向し、西から北へ緩く湾曲するが、北側以外は調査区外に続くため、詳細不明。断面は緩い弧状。底面は東端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅤ層土を主体とし、最上層はⅡ層土を含む。　**出土遺物**


【5号溝】
【6・7号溝】
4号溝
6号溝
8号溝
5号溝
7号溝
トレンチ
A
A'
L=76.00m
6・7号溝SPA
1 黒褐色土（10YR3/2） V層土主体。As-B中量。粘性、しまりやや弱。
H
H'
L=75.50m
6・7号溝SPA
1 黒褐色土（10YR3/2） SPAの1層と同一。
2 褐灰色土（10YR4/1） V層土多量。暗褐土ブロックやや少量。粘性、しまり弱。
A
A'
L=75.50m
5号溝SPA
1 褐灰色土（10YR4/1） V層土多量。粘性、しまりやや弱。
aは暗褐土ブロック中量。
B
B'
L=76.00m
8号溝
5号溝SP8
1 褐灰色土（10YR4/1） 重層土主体。粘性弱、しまりやや弱。bは灰白色。
2 褐灰色土（10YR4/1） SPAの1層と同一。
0 1:100 3m
0 1:60 2m

第8図 5～7号溝

覆土中から陶器、磁器、土師器、須恵器の細片が少量出土した。　時期　堆積状況から中～近世と考えられる。

9号溝（第9図、PL. 3）　位置　1区東端部、2c区西端部。（X＝34.450～34.458、Y＝－66.840～－66.848）　重複　調査区の制約上、直接的な接続は観察できないが、11号溝は位置関係から本跡の延長にあたると考える。8号溝は覆土の様相から、ほぼ同時期と考えられる。　走向方位　N－17°－E。　規模　11号溝も含めた検出長［18.34］m、上幅5.02～5.73 m、下幅4.39～4.59 m、深さ0.38 m。底面の標高は北端で74.98 m、南端で75.15 m。　形状等　南北方向に走向し、北側は11号溝に、南側は8号溝に接続すると考える。断面は緩い逆台形状。底面は北端に向かって緩く傾斜する。覆土はV層土を主体とし、最上層はⅢ層土を含む。　出土遺物　覆土中から古銭1点が出土したが、腐食と摩滅が激しく、銭種等は不明である。　時期　堆積状況から中～近世と考える。

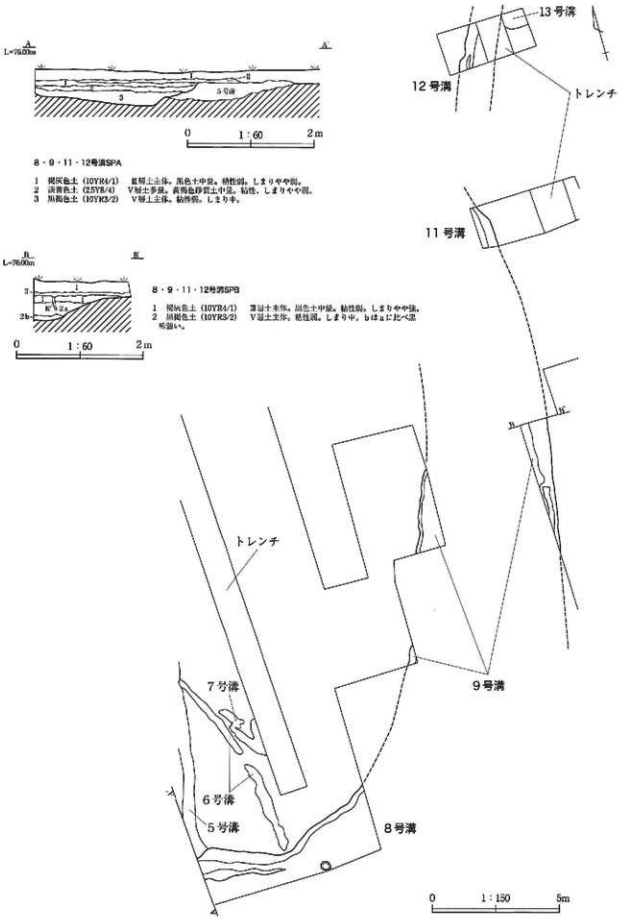
10号溝（第10図、PL. 3）　位置　2b区西端部。（X＝34.445～34.448、Y＝－66.833～－66.835）　走向方位　N－28°－W。　規模　検出長［3.81］m、上幅1.02～1.10 m、下幅0.47～0.92 m、深さ0.12 m。底面の標高は北端で75.26 m、南端で75.28 m。　形状等　北西～南東方向に走向し、両端は調査区外。断面は緩い孤状。底面は北端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅢ層土を主体とし、As-Aを含む。　出土遺物　覆土中から土師器細片1片が出土した。　時期　堆積状況から近世以降と考える。

11号溝（第9図、PL. 3）　位置　2c区東端部。（X＝34.465～34.468、Y＝－66.840）　重複　調査区の制約上、直接的な接続は観察できないが、9号溝は位置関係から本跡の延長にあたると考える。　走向方位　N－8°－W。　規模　検出長［1.83］m、検出上幅［0.23～0.62］m、検出下幅［0.10～0.25］m、深さ0.16 m。底面の標高は北端で75.12 m、南端で75.08 m。　形状等　南北方向に走向する。東側以外は調査区外に続き、詳細不明。底面は南端に向かって緩く傾斜する。覆土はV層土を主体とし、As-Bを含む。　出土遺物　なし。　時期　堆積状況から中～近世と考える。

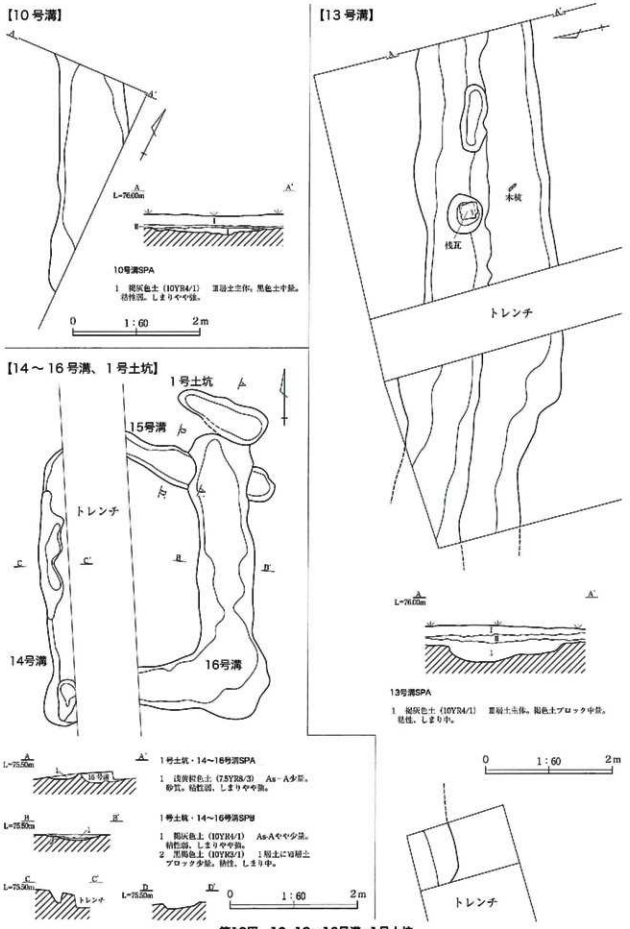
12号溝（第9図、PL. 3）　位置　2a区。（X＝34.473～34.474、Y＝－66.838）　重複　試掘トレンチが重複し直接的な関係は観察できないが、覆土の様相からは13号溝より古いと考える。　走向方位　N－25°－E。　規模　検出長［2.10］m、検出上幅［0.98］m、検出下幅［0.60］m、深さ0.18 m。底面の標高は75.05 m。形状等　北東～南西方向に走向する。南北は調査区外に続き、東側は試掘時の深掘りトレンチが重複し、詳細は不明。覆土はV層土を主体とし、As-Bを含む。　出土遺物　覆土中から須恵器甕1片が出土した。　時期　堆積状況から中～近世と考える。

13号溝（第10図、PL. 3）　位置　3区北端部。（X＝34.470～34.473、Y＝－66.824～－66.832）　重複　試掘トレンチが重複し、直接的な関係は観察できないが、覆土の様相からは12号溝より新しいと考える。　走向方位　E－15°－S。　規模　検出長［8.46］m、上幅1.83～2.62 m、下幅1.02～1.31 m、深さ0.27 m。底面の標高は東端で74.93 m、西端で74.95 m。　形状等　東西方向に走向し、両端は調査区外。南側の立ち上がりはテラス状の緩い平坦面を成すが、土層断面に重複関係は観察できず、本跡の一部と考えられる。底面は東端に向かって緩く傾斜する。覆土はⅢ層土を主体とし、As-Aを含む。　出土遺物　底面に掘り込まれたピット内から桟瓦が1点出土したほか、覆土中からは、ガラス瓶、染付椀の破片や、土師器坏・甕、須恵器壺ないし瓶類の細片等が、少量ながら雑多に出土した。　時期　堆積状況と出土遺物から近世以降と考える。

14号溝（第10図、PL. 3）　位置　3区中央部。（X＝34.464～34.468、Y＝－66.828）　重複　試掘トレンチが重複し、直接的な関係は観察できないが、覆土の様相からは15・16号溝と同時期と考える。　走向方位　N－4°－W。　規模　検出長［4.34］m、検出上幅［0.47］m、検出下幅［0.33］m、深さ0.07 m。底面の標高は東端で75.24 m、西端で75.23 m。　形状等　南北方向に走向する。南北は徐々に浅くなり消失。東側は試掘トレンチが重複し、詳細不明。覆土はⅢ層土を主体とし、As-Aを含む。　出土遺物　覆土中から土師器坏と甕の細片各1片が出土した。　時期　堆積状況から近世以降と考える。



第9図 8・9・11・12号溝



第10図 10・13～16号溝、1号土坑

15号溝（第10図、PL. 3） **位置** 3区中央部。（X＝34.468、Y＝－66.825～66.828） **重複** 16号溝と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。 **走向方位** E－17°－S。 **規模** 検出長［2.54］m、上幅0.47 m、下幅0.33 m、深さ0.09 m。底面の標高は北端で75.34 m、南端で75.25 m。 **形状等** 北西～南東方向に走向する。東端は徐々に浅くなり消失。西側は試掘トレンチが重複し、詳細不明。覆土はⅢ層土を主体とし、As-Aを含む。 **出土遺物** なし。 **時期** 堆積状況から近世以降と考える。

16号溝（第10図、PL. 3） **位置** 3区中央部。（X＝34.464～34.468、Y＝－66.825～66.828） **重複** 15号溝・1号土坑と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。また、試掘トレンチが重複し、直接的な関係は観察できないが、覆土の様相からは、14号溝とも同時期と考える。 **走向方位** N－2°－E。南端部はE－1°－N。 **規模** 検出長［4.54］m、上幅0.58～0.89 m、下幅0.18～0.66 m、深さ0.17 m。底面の標高は北端で75.15 m、南端で75.22 m。 **形状等** 南北に走向し、南端部で西側へL字状に屈曲する。北端は徐々に浅くなり消失。西側は試掘トレンチが重複し、詳細不明。覆土はAs-Aを含む。 **出土遺物** 覆土中からガラス片や土師器坏・甕の細片が、ごく少量出土した。 **時期** 堆積状況から近世以降と考える。

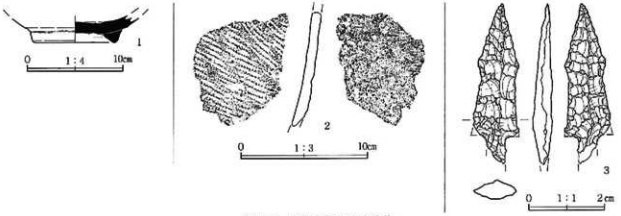
（3）土坑

1号土坑（第10図、PL. 3） **位置** 3区中央部（X＝34.469、Y＝－66.826） **重複** 16号溝と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期と考えられる。 **主軸方位** W－25°－N。 **規模** 長軸1.51 m、短軸0.65 m、深さ0.09 mを測る。 **形状等** 平面不整楕円形、断面弧状を呈する。覆土はAs-Aを含む。 **出土遺物** なし。 **時期** 堆積状況から近世以降に帰属すると考える。

（4）遺物包含層（第3・11図、PL. 3・4）

1区の北東部と南端部では、遺構確認面としたⅦ～Ⅷ層中に少量ながらも遺物の包含が確認できたため、座標を基にしたグリッドを設定し、XI層まで面的に掘り下げて遺構確認を行った。その結果、縄文～古墳時代の雑多な遺物が少量出土したが、遺構は確認できなかった。グリッド1のⅦ層からは、第11図1の須恵器高台付坏が出土。底径の小径化はさほど顕著ではなく、底～体部にかけての器形屈曲点付近に高台を付すが、整形は粗雑で、断面形はやや扁平で緩い三角状を呈する。底部は回転糸切り後無調整。概ね9世紀後半頃に比定できるだろう。また、Ⅷa層下位からは、2と同一個体と考えられる縄文土器深鉢胴部2片と土師器甕細片2片が出土した。グリッド2のⅦa層中位からは、2の縄文土器深鉢片が出土した。外面には単節LRを縦位に施文する。諸磯a式か。同一層位からは他に、土師器坏細片4片・甕細片47片、須恵器坏細片1片・甕1片が出土した。Ⅷ層下位からは、土師器坏細片6片・土師器甕細片28片・土師器S字状口縁台付甕肩部細片1片、須恵器坏細片1片が出土した。出土した土師器は、いずれの層位でも摩滅が著しく、比較的多く出土した土師器甕の細片は、層位を問わず、同一個体と考えられるものが混在する。グリッド3のⅧc層中位からは、3の石鏃が出土した。表裏面ともに左右縁辺から中心に達する丁寧な整形剥離が施され、鏃身は、先端部と基部の境付近に段を有し、細長い五角形鏃を作出する。基部は括れ、以下直線的に微細調整剥離が施され、基端に向かってやや広がる。細長く、やや大形の平基有茎鏃で、縄文時代晩期～弥生時代に比定できる可能性がある。他に、Ⅷa層下位から土師器甕細片7片、Ⅷb層から土師器甕細片1片が出土し、いずれもグリッド2同様に摩滅が著しい。グリッド4のⅧb層からは、土師器甕細片1片と須恵器甕細片1片が出土した。いずれの土器片もグリッド2同様に摩滅が著しい。グリッド5のⅧb層からは、土師器甕細片6片・壺細片1片、須恵器甕細片1片が出土した。いずれの土器片もグリッド2同様に摩滅が著しい。グリッド6のⅧb層からは、土師器坏細片3片が出土した。

以上、グリッド調査した遺物包含層は、遺構に伴わず、Ⅷ層の細分層位の上下を問わず縄文時代前期～平安時代の遺物を雑多に包含し、いずれの土器も摩滅が著しい。このことから、Ⅷ層の形成要因として、洪水堆積等の二次的堆積が推測でき、これに流入した遺物群によって包含層が形成されたものと判断できる。



第11図　遺物包含層出土遺物

第3表　遺物包含層出土遺物観察表

番号	出土位置	層位、層相	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形の特徴	残存状況 備考
1	近接	第3層 粘質土	－	6.2	[2.1]	粗品片岩、小礫、黒色粒	やや不良	灰白色	体部外傾ロクロナデ、底部外面回転糸切り後静止糸痕。刻付台石、内面ロクロナデ。	底部のみ残。ロクロ痕明方向不明。
2	第a溝	褐文土器 溝床	－	－	[3.5]	石英、雲母、小礫、黒色粒	良好	にぶい橙色	胴部外面に単節LR縄文残文後ヘラ。	破片。器種・形式不明。
番号	出土位置	層位、層相	長径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	重さ (g)	器形、成・整形の特徴		残存状況 備考
3	第c溝 中位	石器　石黒	[4.2]	1.2	0.5	チャート	1.9	両身は先端部と基部の境界凹に段を有し、緩長い正鋭形。を作出する。細長く、やや大形。		先端部欠損。

Ⅵ　発掘調査の成果と課題

下斎田重土薬師遺跡における８世紀後半の集落展開について

今回確認した古代の遺構は、８世紀後半の１号竪穴住居跡のみであり、遺構密度は希薄である。周辺調査例を概観しても該期の遺構分布は散漫であり、「集落」の体を成すとは言い難い。ここでは、周辺の調査例を参考に、井野川下流域東岸の微高地上における集落展開を整理し、本跡をその動向の中に位置付けてみたい。

問題の所在　本遺跡１号竪穴住居跡は、「集落」の体を成すとは言い難い。しかし、周辺には該期の竪穴住居跡が点々と確認できる。つまり、これらの竪穴住居跡群は、集落の紐帯が希薄化した環境下に営まれていた可能性がある。竪穴住居跡の構築は本来、集落における最も基本的な労働力の集中を必要とする作業とすれば、[1]その環境から逸脱したように見える、これらの竪穴住居跡群は、どのような社会的背景の中で存在したのだろうか。

事例　下斎田重土薬師遺跡の既調査例（高崎市2013c、群埋文2010）と、上滝遺跡群（高崎市2013a・b）、下斎田遺跡群（高崎市2013a・b）、下滝高井前遺跡（群埋文2013）、下斎田・滝川A遺跡（群埋文1987）の調査例から、８世紀後半の竪穴住居跡を抽出し、第４表に示した。該当した竪穴住居跡は10軒のみで、上滝遺跡群と下斎田遺跡群では確認されていない。これらを概観すると、一辺５ｍを下回る小規模な竪穴住居跡が多く、カマドの位置は東に統一されるが、主軸は東を基調としつつもやや規則性に欠ける。明瞭な床面硬化は認められず、ほとんどの場合において柱穴も確認されていない。遺物はカマド周辺を中心に少量出土するのみで、際立った遺物の出土もない。規模や柱穴の状況からは、竪穴住居跡として貧弱な印象を受け、床面の硬化状況や出土遺物の少なさからは、長期的な居住すら疑われるだろう。[2]

第４表　周辺遺跡における８世紀後半の竪穴住居跡

遺跡名	遺構名	規模（長径×短径×深さｍ）	主軸方位	床面硬化	土柱穴	カマド位置	出土遺物
本遺跡	１号住居跡	3.76 × 3.59 × 0.33	E－18°－N	一部固い硬化	なし	東	土師器坏・甕。少量。
下滝高井前遺跡	3区 22号住居	4.68 × 3.73 × 0.13	E－5°－N	固い硬化	なし	東	土師器坏・甕。少量。カマド周辺のみ。
	3区 94号住居	4.66 × 3.57 × 0.35	E－2°－N	一部硬化	なし	東	土師器坏・甕、土錘。
	3区 99号住居	2.85 × [1.71] × 0.30	不明	なし	なし	不明	土師器坏。少量。床下土坑のみ。
	3区 100号住居	6.17 × [3.94] ×不明	不明	一部硬化	なし	不明	土師器坏・甕。
下斎田重土薬師遺跡（群埋文調査地点）	１号住居跡	5.16 × 4.52 × 0.18	E－1°－N	なし	4本	東	土師器坏・甕、須恵器坏、鉄鏃刀子、紡石、砥石跡。少量。
下斎田・上滝A遺跡	３号住居跡	4.14 × [2.62] × 0.20	E－2°－N	なし	なし	不明	土師器坏・甕・鍋、須恵器蓋・坏・甕・壺、埴輪。
	３号住居跡	4.29 × 3.13 ×不明	E－28°－N	不明	なし	東	土師器坏、須恵器坏。少量。カマド周辺のみ。
	４号住居跡	3.49 × 2.65 × 0.20	E－17°－S	不明	なし	東	土師器坏・甕・鍋、須恵器坏・蓋・甕・壺、石製紡錘車。
	13号住居跡	3.20 × 3.00 × 0.12	E－2°－S	不明	なし	東	土師器坏（黒色土）、甕。カマド周辺のみ。

集落の動向　参考に、多数の竪穴住居跡が調査された、下滝高井南遺跡における6～8世紀の動向を示すと、6世紀：53軒、7世紀：40軒、8世紀：7軒で、8世紀に竪穴住居跡が激減する。これに、先述の周辺遺跡群を加えた住居規模の推移を第12図に示す。傾向として、時期が下ると一辺5m以上の中～大規模な竪穴住居跡は減少し、6世紀以降主体的である5m以下の小規模な竪穴住居跡が、8世紀も少数残るような推移を示す。

第12図　周辺遺跡における竪穴住居規模の推移

考察　本遺跡周辺に営まれた古墳時代後期～平安時代の集落は、8世紀を画期に衰退する。6～7世紀には、周辺では高位にあたる井野川東岸の段丘上に、大型の竪穴住居跡を伴う大規模集落が形成されるが、その要因は6世紀後半に築造された綿貫観音山古墳が対岸に所在することから示唆的だろう。集落は8世紀に解体し、段丘の背後に形成された微高地にかけて、集落の体を成さない小規模な竪穴住居跡が点々と営まれる。該期におけるまとまった規模の集落は、同じ微高地上では、やや離れて約2.5km北方に位置する下滝天水遺跡や元島名下河原遺跡に確認できる。また、郡界の可能性も指摘される[3]井野川の対岸では、綿貫伊勢遺跡に大規模集落が確認でき、綿貫小林前遺跡の大規模な区画溝や、綿貫遺跡の基壇跡と瓦葺建物跡等も確認され、郡内の中核的な地域であったと想像される。つまり、本遺跡周辺に点在する小規模な竪穴住居跡群の母体となりうる拠点的な集落は、地理的・行政的な意味で、やや隔絶した位置に想定できる。他方、本遺跡の東方に広がる後背湿地には、その施工年代は未だ不明な点も多いが、広範囲に As-B 直下の条里型水田が確認されている[4]。このような周辺景観に加えて、先述した、本遺跡周辺の該期における竪穴住居跡群の諸相を考慮するに、これらの竪穴住居跡群には、農繁期における短期的・季節的な滞在施設としての性格も想定できるのではなかろうか。ちなみに、『日本書紀』大化二年三月甲申条・『類聚三代格』延暦九年四月十六日太政官符・『日本後紀』弘仁二年五月甲寅条からは、播種と田植えの季節に、魚漁の提供を伴う一時的な労働力の確保があったことが窺われ、『延喜式』巻五十雑式からは、稲刈りの季節にも、落穂拾いを伴う一時的な労働力の確保があったことが知れる[5]。

綿貫観音山古墳に代表されるような、古墳時代における本地域周辺の濃密な集落展開は、8世紀における律令制的な再編によって、特に、郡界の不明瞭な井野川東岸の微高地では衰退に向かい、本遺跡周辺からはやや離れた位置に想定される拠点的な集落に集約されたと想定する。しかしながら、東方の後背湿地に展開する条里型水田は広大であり、農繁期における季節的な集約的労働とその滞在施設として、本遺跡周辺に点在する該期の竪穴住居跡群は営まれたのではなかろうか。

以上、周辺遺跡を含めた6～8世紀の集落展開から、本遺跡1号竪穴住居跡の性格を論じたが、調査は遺跡全体のごく一部に過ぎず、また、周辺の条里型水田施工時期や郡界の問題などは未だ議論の途上にあり、推測の域を出ない。調査例の増加と研究の進展に期待する次第である。

註

（1）竪穴住居跡の機会的成立の意味と分析の視点については、宮西 2007 に詳しい。宮西氏一流は、竪穴住居跡の掘方を含めた社会的な機能・構造の発達から、竪穴住居跡の機能を古墳・奈良時代の特徴として捉えている。

（2）ただし、東国は竪穴住居跡の出現には、東国の集団規模の違いが、機動性の低下による形態等、社会的な要因も考えられるだろう。

（3）郡馬郡・那波郡・片岡郡の郡界の確定については、関口 2012 を参考にした。

（4）この施工年代に関係するAs-B下水田である三村町一次不通跡では、本遺跡に伴う「1号竪穴住居」の機能上半から8世紀末～9世紀前半の土師器杯が出土している（三村町教育委員会 2003）。また、三村町前町遺跡でも、大規模な畦状遺構は8世紀後半を起点としていると考えられている（中江 2000）。

（5）『日本書紀』大化二年三月甲申条：「是月、詔曰、…其飯魚者、遠海難至、宜令各処左右所近、宜為国造・伴造・伴造・県主・村主等、宜求其能、勤而取之。」（『日本後紀』弘仁二年五月甲寅条）・『類聚三代格』延暦九年四月十六日太政官符：「…其稲刈之人多悉参酒、携壮男女之輩、酒肴之費、倍於常日。…」・『延喜式』巻五十雑式：「凡稲刈之日、…其落穂者、…」

（6）『日本書紀』大化二年三月甲申条：「…凡諸人、…、或造作、或運土石、或作舟楫、或作橋梁、或作宮殿、或造作城柵・堤防、宜次第而興。…」

引用・参考文献

宮西智一 2007「4 小規模竪穴から登呂・平安時代の竪穴住居」『住まいの考古学』学生社

関口功一 2012「上毛野の古代社会発展過程」同朋舎

中江正彦 2000「時有遺跡における大型河川の沿岸集落」『関西考古学研究』13号

群馬県歴史文化財調査事業団 1986「下滝遺跡・元屋A遺跡　元屋B・C遺跡」

群馬県歴史文化財調査事業団 2004「下滝天水遺跡」

群馬県歴史文化財調査事業団 2006「下滝遺跡・元屋遺跡」

群馬県歴史文化財調査事業団 2014「下滝高井南遺跡」

高崎市教育委員会 2013a「下滝遺跡第1」

高崎市教育委員会 2013b「下滝遺跡第2」

高崎市教育委員会 2013c「下滝遺跡第3」

三村町教育委員会 2004「一本木遺跡」

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989「日本書紀　関口功一・宮西智宏・大澤伸啓訳」

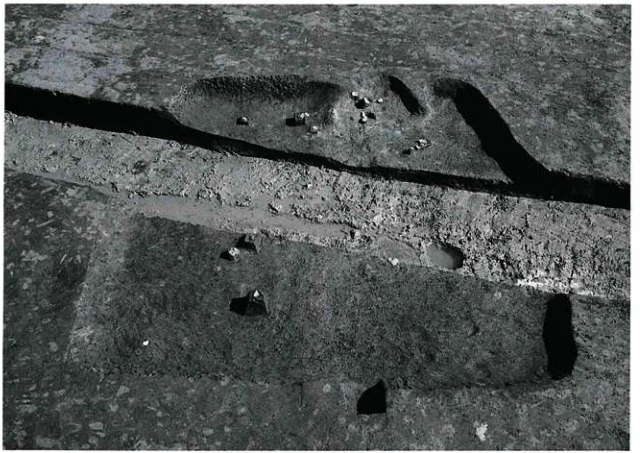
亀岡拓 2000「元島名下河原遺跡」日本考古学年報 47

山口逸弘 1992「関東系・東国」埋蔵文化財研究会

山口逸弘 2009「関東平野・低地遺跡」埋蔵文化財研究会大会

写 真 図 版

調査区全景（上が北）



1号竪穴住居跡　完掘状況（南西から）

1号竪穴住居跡カマド　完掘状況（南西から）

1号竪穴住居跡No.1　出土状況（東から）

1号竪穴住居跡掘方　完掘状況（南西から）

1号溝　完掘状況（南から）

2号溝　完掘状況（南から）

3・4号溝　完掘状況（西から）

5号溝　完掘状況（南から）

6～8号溝　完掘状況（南西から）

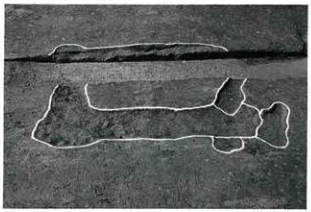
9号溝　完掘状況（北東から）

10号溝　完掘状況（北西から）

11号溝　完掘状況（南東から）

12号溝　完掘状況（南東から）

13号溝　完掘状況（西から）

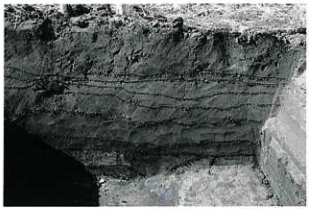


14～16号溝、1号土坑　完掘状況（東から）

包含層グリッド1～3　調査状況（南西から）

包含層グリッド3 No.3　出土状況（北東から）

包含層グリッド4～6　調査状況（北から）



基本層序A－A'（東から）

発掘調査風景（北西から）

除雪作業風景（北東から）

1住-1

1住-2

包含層-1

包含層-2

包含層-3(1/2)

出土遺物

報告書抄録

カタカナ	シモサイダジュウドヤクシイセキ
書名	下斎田重土薬師遺跡2
副書名	下斎田ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	−
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第337集
編著者名	中村岳彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371−0031　群馬県前橋市下小出町1-15-3
発行機関	高崎市教育委員会
発行機関所在地	〒370−8501　群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2014年9月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	位置 北緯	位置 東経	調査期間	調査面積	調査原因
シモサイダジュウドヤクシイセキ 下斎田重土薬師遺跡	タカサキシシモサイダ 高崎市下斎田 402-1、403-1	102020	589	36°18′19″	139°5′32″	20130205 ～ 20130305	510.6㎡	ガソリンスタンド建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
シモサイダジュウドヤクシイセキ 下斎田重土薬師遺跡	集落	奈良時代	竪穴住居跡　1軒	須恵器 土師器	・8世紀後半の小規模な竪穴住居跡。
		中近世以降	溝　16条 土坑　1基	陶磁器	

下斎田重土薬師遺跡 2

下斎田ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年9月24日　印刷
2014年9月30日　発行

発行　高崎市教育委員会
〒370－8501　群馬県高崎市高松町35-1
TEL　027-321-1292

編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社